第15回 日本在宅医学会大会 プログラム別 詳細情報

カテゴリー	シンポジウム(公募演題)
タイトル	在宅療養支援診療所機能強化型の使い方
日　　時	平成 25 年 3 月 31 日　9：00～12：00
会　　場	第 6 会議室
所 属 先	多摩市医師会
共 著 者 (敬称略)	大池ひとみ、田村豊、佐々部一、中村弘之、米戸敏彦、明石のぞみ、松田環、和光儀威、佐藤秀紀、新垣美郁代、斉藤宣照、関原正、竹内あづさ、武島英人
企画趣旨	【目的】今年 4 月、機能強化型在宅療養支援診療所がはじまった。診療所医師の 24 時間体制、連携を目指していると思われるがまだ不確定の部分も多い。今回我々は、これをどのように生かし、医師・医療介護スタッフの連携、在宅医療・在宅ケアの質的向上に寄与できるかを、検討実践している最中なのでこれを報告する。この機能がうまく働き、医師・医療介護スタッフのみならず、広く住民に周知連携することで、必要なその時、本人家族にとって安心・質の高い医療・ケアが受けられることをめざす。 【背景】30 年後 170 万人の最期の場所が問われる時代にはいる。多摩市では、現在人口 14 万。高齢化率は 24%であるが、世界一急速に高齢化がすすむ地域と言われており、75 歳以上の予測人口が、8200 人から 29000 人、予測死亡数も 780 人から 1500 人に増加というデータもある。一方、他の多くの「普通の」地域がそうであるように、高齢化社会のおける医療資源の役割とその使い方に対する認識はうすく、都心のかかりつけ医・病院志向がつよく、実体験としての高齢者の生活をイメージできないなどのベットタウン・ニュータウンであるがゆえ特性もあり、在宅医療意識は、医師スタッフ住民ともに低い。 【実践報告】多摩市医師会は管理者会員から成るＡ会員 104 名の医師会であるが、そのうち 13 の診療所(法人として複数医師を持つ診療所は 2 カ所、のこり１１はひとり診療所)と２つの病院で、連携型を二つ作った。活動内容としては、１）医師による 24 時間対応。Ａチームは完全当番制。Ｈチームは主治医をとおして当番医につなぐ主治医性。サイボウズなどツールの検討。２）カンファレンス。患者情報の交換、書類・コストなど事務的な基本事項のレクチャー。失敗も含めた症例検討、外部講師の招へいと学会等の情報提供など。３）病診連携の強化。４）皮膚科眼科など他科との往診連携　５）医療介護スタッフの勉強会の講師。６）医療福祉介護連携情報交換会等行政主体の行事の参加交流。７）特に大病院からの退院調整など窓口機能の検討。　８）市民への在宅医情報公開、公開講座など啓発活動１０）医師コミュニティ形成のための交流会など。 【考察】在宅療養支援診療所機能強化型は、1）在宅医師にとって、24 時間体制、経済的裏づけ、連携・知識情報交換など有意義なシステムであるが、２）

	従来型ひとり診療所の医師の新しい形の在宅診療への敷居を低くし参入を助けるという意義も大きい。3）医療介護にかかわる多職種との連携にも役立ち、４）市民・行政など外部への平等性を保ったアピールができ、窓口機能としても期待される。 【結語】在宅療養支援診療所機能強化型の有効利用は、医師のあんしんにとどまらず、医療介護スタッフ、医療・ケアを受ける本人家族、広く地域住民にとってのあんしんに寄与すると考えられる。在宅療養支援診療所機能強化型は、すべての地域に設置可能な在宅医療推進及び連携の要として、その役割を果たせるよう今後も努力を続けたいと思う。